

漢代における長吏の任用・補論

西 川 利 文

はじめに

筆者は「尹湾漢墓簡牘よりみた漢代の長吏」⁽¹⁾および「漢代における長吏の任用——尹湾漢墓簡牘を手がかりとして——」⁽²⁾において、尹湾漢墓簡牘三・四号木牘（以下、三・四号木牘と略称）に見える記事を手がかりに、前漢後半期を中心とする県クラスの長吏の任用について分析した。ただそこでは紙幅の関係で、分析の前提となる考証や先行研究との比較検討をかなり省いた。そこで本稿では、これまでの筆者の分析で十分に論を展開できなかった点を補足することを主目的に、さらにそこから漢代の長吏任用に関する新たな論点を提示することにした⁽³⁾。

最初に、筆者のこれまでの分析結果を確認しておこう。三・四号木牘の現任長吏の異動経路を見ると、前職では官僚よりも属吏が目立ち、また異動理由では察举科目と考えられるものから文献に類例のないものまで多様なものが見られるが、特に功次による異動が目立つ。このような実態を前提として、まず「尹湾漢墓簡牘よりみた漢代の長吏」⁽⁴⁾（以下、西川A論文）では、功次によつて属吏から長吏に異動する者が目立つ原因を長吏の官秩構成から分析し、全長吏のうち半数近くが、基本的に官僚からの異動や察举による属吏からの異動がない官秩二百石の長吏に占められていることに、その一端があることを指摘した。また「漢代における長吏の任用」⁽⁵⁾（以下、西川B論文）では、異動理由ごとにそこに見える異動傾向を分析し、官僚が長吏に異動する場合には異動理由にかかわりなく一段上層

の官秩の長吏に異動したのに対して、属吏が異動する場合、異動理由によつて就任する長吏の官秩に大きな違いがあることを指摘した。これらのことは、従来の長吏任用に関する研究に一定の反省を迫るとともに、察举制度や功次の問題に関する研究にも、かなりの修正が必要なことを意味すると考える。

以上の前提に立つて、まずは西川 A・B 論文で十分に検討できなかった点を分析することにしよう。なお本稿で用いる三・四号木牘の釈文は、西川 A・B 論文と同様、報告書『尹湾漢墓簡牘』^⑤（以下『報告書』と略称）所載の釈文に基づいて筆者が不明箇所を復元したものであることにする。

一 三・四号木牘に見える異動理由の分析

さてこれまでの拙稿では、西川 A 論文（七頁）で三・四号木牘に見える長吏任用の概略を一覧表として示したが、その全貌を具体的に示すことができなかった。そこで本稿では、これまでに分析を行った一〇四名の長吏の異動経路を一覧表として具体的に示すとともに、さらにそこに、前職または異動理由が不明でこれまで十分に分析できなかった記事一八例を加え、合計一二二名の事例を手がかりに分析を進めることにしたい。なお三・四号木牘には一四五名の長吏の情報が記されるが、木牘の状態などの理由によつて、本稿で必要な前職および異動理由がともに判明しない者が二三名存在する。

本稿では、この一二二名の事例を、異動理由ごとに七つの表に分けて提示する。ここで、これから掲げる表一と表七の見方を、次に掲げる表一を例にとつて示しておこう。まず左端の通番は七表を通して付けた番号で、分析の対象とする長吏が一・二名であるから 1〜122 の番号が付くことになる。本稿では、三・四号木牘の該当記事をすべてこの通番で示すことにする。なお各表では、三・四号木牘の記載事項のうち、本稿の分析に直接関係のない現任長吏の出身郡県・姓名については省略している。また煩を避けるため以下の表では、『報告書』所載釈文に付せら

れている記号や筆者が復元作業の際に付した括弧類はすべて省略している。

次に現職の項目には、筆者の復元作業によって得られた結果に基づいて県名・職階を示し、その横の官秩の項目には、尹湾二号木牘によって得られる各長吏の官秩を示している。また前職の項目には、現任長吏の出身郡県・姓名の記載に続いて記される「故○○」で記されるものを示し、その横の官秩の項目には、西川B論文で提示したそれぞれの官秩を示している。続く異動理由の項目は、基本的に「以○○遷(除・補)」で記される部分を示したが、貶秩(表六)については、前職の記載箇所に「故貶秩○○」と記されることから、異動理由としては「貶秩」とのみ示した。最後の該当記載の項目には、筆者がこれまで用いてきている略号で、各記事の三・四号木牘における該当箇所を示しておいた。

以上のようにして作成した各表を手がかりにして、西川B論文と同様に各異動理由ごとに分析していくことにしよう。

(一) 功次

表一は、功次関係の異動理由で長吏に異動した者をまとめたものである^⑦。

さて表一を見ると、七三名が功次によって異動している。ただこれまでは功次として一括していたが細かく見ると、1〜6が「功次」、7〜72が「功」、73が「積功^⑧」というように表記が若干異なっており、三・四号木牘では「以功遷」の例が最も多くなる。しかしこの「功次」「功」「積功」で異動傾向が異なることはなく、西川B論文で指摘したように、官僚の場合は一段上層の官秩の長吏に異動し、属吏の場合は基本的に官秩百石(有秩)の者が二百石ないし比三百石という、官僚の官秩の層では最も低い長吏に異動した。例えば功次と功を比較すると、前職が六百石クラスの官僚(1と7)^⑨は千石長吏に異動しているし、また前職が有秩(2〜4と41〜50)や侯門大夫(4・5と

表一 功次關係

| 通番 | 現 職 | 官秩 | 前 職 | 官秩 | 異動理由 | 該當記載 |
|-----|-------|------|-----------|------|------|---------|
| 001 | 蘭陵令 | 1000 | 故□□令 | 600 | 以功次遷 | 3A-1-14 |
| 002 | 鄉獄丞 | 200 | 故□□有秩 | 100 | 以功次遷 | 3A-1-3 |
| 003 | 即丘丞 | 200 | 故頓丘北鄉有秩 | 100 | 以功次遷 | 3A-3-5 |
| 004 | 給右尉 | 200 | 故白馬門成鄉有秩 | 100 | 以功次遷 | 3B-1-4 |
| 005 | 厚丘丞 | 200 | 故侯門大夫 | 100 | 以功次遷 | 3A-3-17 |
| 006 | 況其左尉 | 200 | 故侯門大夫 | 100 | 以功次遷 | 3A-3-10 |
| 007 | 海西令 | 1000 | 故漁陽□□左騎千人 | 600 | 以功遷 | 3A-1-10 |
| 008 | 鄉右尉 | 400 | 故侍郎 | 比400 | 以功遷 | 3A-1-5 |
| 009 | 鄉左尉 | 400 | 故□陵長 | 300 | 以功遷 | 3A-1-4 |
| 010 | 昌慮相 | 400 | 故穀陽丞 | 300 | 以功遷 | 3B-2-3 |
| 011 | 況其長 | 400 | 故陰陵右尉 | 300 | 以功遷 | 3A-3-8 |
| 012 | 建陵相 | 300 | 故郎中 | 比300 | 以功遷 | 3B-3-7 |
| 013 | 都陽相 | 300 | 故郎中 | 比300 | 以功遷 | 3B-3-17 |
| 014 | 建陵丞 | 200 | 故郎中 | 比300 | 以功遷 | 3B-3-8 |
| 015 | 襄賁丞 | 300 | 故侯家丞 | 比300 | 以功遷 | 3A-2-11 |
| 016 | 都平相 | 300 | 故龍亢尉 | 200 | 以功遷 | 3B-3-15 |
| 017 | 鉄官長 | 300 | 故臨朐右尉 | 200 | 以功遷 | 4A-1-15 |
| 018 | 襄賁右尉 | 300 | 故曲陽尉 | 200 | 以功遷 | 3A-2-13 |
| 019 | 建陽相 | 300 | 故鄉獄丞 | 200 | 以功遷 | 3B-3-9 |
| 020 | 建陵侯家丞 | 比300 | 故象林候長 | 100 | 以功遷 | 4A-2-11 |
| 021 | 平曲侯家丞 | 比300 | 故山陽大守文学卒史 | 100 | 以功遷 | 4A-2-9 |
| 022 | 都陽侯家丞 | 比300 | 故上党大守文学卒史 | 100 | 以功遷 | 4A-2-15 |
| 023 | 部鄉侯家丞 | 比300 | 故桂陽大守文学卒史 | 100 | 以功遷 | 4A-2-16 |
| 024 | 昌慮侯家丞 | 比300 | 故有秩 | 100 | 以功遷 | 4A-2-3 |
| 025 | 干鄉侯家丞 | 比300 | 故東武有秩 | 100 | 以功遷 | 4A-2-10 |
| 026 | 建鄉侯家丞 | 比300 | 故有秩 | 100 | 以功遷 | 4A-2-14 |
| 027 | 建陽侯家丞 | 比300 | 故侯僕 | 100 | 以功遷 | 4A-2-6 |
| 028 | 都平侯家丞 | 比300 | 故侯僕 | 100 | 以功遷 | 4A-2-8 |
| 029 | 東安侯家丞 | 比300 | 故侯僕 | 100 | 以功遷 | 4A-2-13 |
| 030 | 容丘侯家丞 | 比300 | 故侯行人 | 100 | 以功遷 | 4A-2-4 |
| 031 | 新陽侯家丞 | 比300 | 故承鄉侯行人 | 100 | 以功遷 | 4A-2-17 |
| 032 | 陰平侯家丞 | 比300 | 故侯門大夫 | 100 | 以功遷 | 4A-2-12 |
| 033 | 南城尉 | 200 | 故大守卒史 | 100 | 以功遷 | 3B-2-16 |
| 034 | 容丘尉 | 200 | 故大守卒史 | 100 | 以功遷 | 3B-2-19 |
| 035 | 即丘左尉 | 200 | 故大守卒史 | 100 | 以功遷 | 3A-3-6 |
| 036 | 曲陽丞 | 200 | 故東郡大守文学卒史 | 100 | 以功遷 | 3B-1-13 |
| 037 | 良成丞 | 200 | 故大山大守文学卒史 | 100 | 以功遷 | 3B-2-12 |
| 038 | 曲陽尉 | 200 | 故南海大守文学卒史 | 100 | 以功遷 | 3B-1-14 |

| | | | | | | |
|-----|---------|------|-----------|------|-----|---------|
| 039 | 武陽侯国丞 | 200 | 故武都大守文学卒史 | 100 | 以功遷 | 4A-1-8 |
| 040 | 平曲丞 | 200 | 故沔陽大守□□□□ | 100 | 以功遷 | 3B-3-2 |
| 041 | 開陽左尉 | 200 | 故御史有秩 | 100 | 以功遷 | 3A-3-2 |
| 042 | 昌慮右尉 | 200 | 故御史有秩 | 100 | 以功遷 | 3B-2-6 |
| 043 | 繪丞 | 200 | 故□□有秩 | 100 | 以功遷 | 3B-1-2 |
| 044 | 南城丞 | 200 | 故有秩 | 100 | 以功遷 | 3B-2-15 |
| 045 | 陰平丞 | 200 | 故有秩 | 100 | 以功遷 | 3B-3-5 |
| 046 | 干鄉丞 | 200 | 故有秩 | 100 | 以功遷 | 4A-1-2 |
| 047 | 新陽丞 | 200 | 故上竺有秩 | 100 | 以功遷 | 4A-1-10 |
| 048 | 塩官別治北蒲丞 | 200 | 故有秩 | 100 | 以功遷 | 4A-1-13 |
| 049 | 鉄官別作□丞 | 200 | 故有秩 | 100 | 以功遷 | 4A-1-17 |
| 050 | 陰平尉 | 200 | 故有秩 | 100 | 以功遷 | 3B-3-6 |
| 051 | 開陽丞 | 200 | 故侯僕 | 100 | 以功遷 | 3A-3-1 |
| 052 | 況其右尉 | 200 | 故侯僕 | 100 | 以功遷 | 3A-3-11 |
| 053 | 臨沂左尉 | 200 | 故侯僕 | 100 | 以功遷 | 3B-1-17 |
| 054 | 即丘右尉 | 200 | 故侯行人 | 100 | 以功遷 | 3A-3-7 |
| 055 | 臨沂丞 | 200 | 故侯行人 | 100 | 以功遷 | 3B-1-16 |
| 056 | 容丘丞 | 200 | 故侯行人 | 100 | 以功遷 | 3B-2-18 |
| 057 | 合郷丞 | 200 | 故侯門大夫 | 100 | 以功遷 | 3B-1-20 |
| 058 | 東安丞 | 200 | 故侯門大夫 | 100 | 以功遷 | 3B-3-14 |
| 059 | 塩官別治郁州丞 | 200 | 故侯門大夫 | 100 | 以功遷 | 4A-1-14 |
| 060 | 昌慮丞 | 200 | 故衛尉属 | 斗食 | 以功遷 | 3B-2-4 |
| 061 | 塩官丞 | 200 | 故大常属 | 斗食 | 以功遷 | 4A-1-12 |
| 062 | 厚丘右尉 | 200 | 故大司農属 | 斗食 | 以功遷 | 3A-3-19 |
| 063 | 建陽丞 | 200 | 故戊校前曲候令史 | 斗食 | 以功遷 | 3B-3-10 |
| 064 | 平曲長 | 400 | 故□□□ | ? | 以功遷 | 3B-1-5 |
| 065 | 良成相 | 400 | 故□□□□ | ? | 以功遷 | 3B-2-11 |
| 066 | 胸邑丞 | 300 | 故長…… | ? | 以功遷 | 3A-2-3 |
| 067 | 曲陽長 | 300 | 故□□ | ? | 以功遷 | 3B-1-12 |
| 068 | 南城相 | 300 | 故保宮北□□ | ? | 以功遷 | 3B-2-14 |
| 069 | 干郷相 | 300 | ? | ? | 以功遷 | 4A-1-1 |
| 070 | 蘭旗侯家丞 | 此300 | □□□ | ? | 以功遷 | 4A-2-2 |
| 071 | 厚丘左尉 | 200 | 故五官□□□□ | ? | 以功遷 | 3A-3-18 |
| 072 | 司吾左尉 | 200 | ? | ? | 以功遷 | 3B-1-10 |
| 073 | 陰平相 | 300 | 故郎中 | 此300 | 以積功 | 3B-3-4 |

57(59)の者はいずれも二百石長吏に異動している。また功と積功でも、前職が郎中(12・13と73)は三百石長吏に異動している。このように表記の違いが異動傾向に現われなすれば、これを一つの異動理由としてみなしてもよいことになる。そうすると、功次や積功にはその例が見えないが、功の中で例えば同じ有秩で二百石長吏に異動した者の他に、比三百石長吏(25(27)がいることからすれば、属吏が功次や積功によつて異動する場合も、二百石ばかりではなく比三百石長吏も、その就任範囲に入つていたと考えられる。

以上のことから、これまで功次・功・積功を一括して功次としてきた。しかし功の例が多いことからすれば、功次ではなく功と表現すべきかもしれない。いづれにしても、はじめにも述べたように属吏の異動の場合に異動理由の違いによる異動の差異が見られるとすれば、功次・功・積功による異動は、百石クラスの属吏が一段上層の官秩(官僚の官秩の層でいえば最も低い官秩の層)へ昇進することを意味するものであり、これによる異動は、他の異動理由と比べて最も昇進幅の小さい異動理由といえるであらう。そしてこのように考えると、前職の不明な64(72)についても、ある程度の官秩の推測ができる。すなわち、四百石長吏に異動した64・65の前職の官秩は比四百石ないし三百石の官僚、また三百石長吏に異動した66(69)の前職の官秩は比三百石・二百石・比二百石の官僚、そして比三百石または二百石長吏に異動した70(72)の前職は百石クラスの属吏だと考えられるのである。¹²⁾

さてここで表一に見える記載の中で、西川A・B論文では十分に触れられなかった点を補足しておこう。まず40の「沔陽太守□□□□」である。これは、廖伯源氏(二六七頁)や李解民氏(五〇頁)も指摘するように、不明の四字は「文学卒史」だと考えられる。¹³⁾それは、40のように具体的な郡名が付く例は、表一にも見えるように三・四号木牘では「文学卒史」(21(23, 36(39, 82・83)ないし「文学」(84)に限られるからである。このように文学卒史ないし文学のみに具体的郡名が記されるのは、その立場の特殊性が関連していると思われるが、この点については稿を改めて述べることにしたい。¹⁴⁾ちなみに「漢書」巻二八地理志によると、水偏の文字と「陽」が合わさった郡名は

漁陽郡しかない。¹⁵⁾

次に14の郎中の官秩を考えておこう。郎中の官秩は一般に比三百石であるが、14は異動した長吏の官秩が前任官の官秩よりも低い二百石であり、一見すると昇進ではなく降格になってしまふ。そこで、筆者は西川A論文で述べたように、現任官の官秩を一時的に上げたと考ええる。しかし李解民氏は、『史記』卷一二一儒林伝の索隠が引く如淳の言に「漢儀、弟子射策するに、甲科百人を郎中に補し、乙科二百人を太子舎人に補す、皆な秩比二百石、次は郡国文学、秩百石なり」とあることによつて、比二百石の郎中もあつたとする(六八頁)。確かに「皆」とあることから、太子舎人ばかりではなく郎中も比二百石だつたとも考えられるが、如淳が引く『漢儀』には史料的な問題がある。

まずこの『漢儀』は、射策合格者の数から考えて後漢時代のものだと考えられる。¹⁶⁾ そうすると例えば『後漢書』紀八靈帝紀の熹平五年(一七六)一二月の条に「太学生の年六十以上百餘人を試みて、郎中・太子舎人より王家郎・郡国文学吏に至るまでに除す」とあるように、後漢時代には射策の結果与えられる官に、同じ郎中でも王国の郎中が加わることもあり、その官秩は『統漢書』百官志五によると二百石である。そして太子舎人の官秩も、『統漢書』百官志四によると二百石であるが、右の靈帝紀の李賢注に引く『漢官儀』に「太子舎人・王家郎中、並びに秩二百石、無員」とあることに注意したい。『漢官儀』では「比」が付かないが、如淳が引く『漢儀』にも本来、太子舎人の後に「王家郎中」があつたと考えると、「皆」は甲科の郎中までかからないことになる。¹⁷⁾ すなわち筆者は、如淳が『漢儀』を引く時、武帝期の射策規定になつた王家郎中を省いて引いたにもかかわらず、「皆」の字だけを残した結果、一般の郎中まで比二百石と考えられるような記載になつたと考えるのである。このように考えると、一般の郎中の官秩は前漢・後漢を通じて比三百石であり、王国の郎中以外は、李解民氏のような比二百石の郎中は存在しなかつたことになる。さらにいえば14は、単に「郎中」とだけあることから、王国の郎中とは考えられ

表二 十歳関係

| 通番 | 現 職 | 官秩 | 前 職 | 官秩 | 異動理由 | 該当記載 |
|-----|-----|-----|------|----|--------|---------|
| 074 | 建郷相 | 300 | 故將軍史 | ? | 以十歳補 | 4A-1-5 |
| 075 | 鉄官丞 | 200 | 故校尉史 | ? | 以軍史十歳補 | 4A-1-16 |

ない。¹⁸⁾

ところで、功次と関連があると思われる異動理由として、三・四号木牘には表二として示したように、十歳というのがある。これは、75に「軍吏十歳」とあるように、武官系統の官府に一〇年間勤務した者を異動させる異動理由だったようである。

功次が一定期間勤務した者を異動させるものだとなれば、十歳も功次と同様の範疇に属する異動理由のようにも見える。ただ十歳が「軍吏」に限られるのならば、文官系統の官府勤務者は十歳による異動からは排除されたであろう。しかし功次には、廖伯源氏が指摘するように(三三三四頁)、軍吏に属するとも考えられる候長(20)や候令史(63)も見える。従って、文官は功次、武官は十歳というように単純に分けられるのではなく、功次と十歳とでは何らかの違いがあったと考えられる。廖伯源氏によると、それは「功」の有無だという。すなわち武官でも、功のある者は功次、功のない者は十歳によつて異動したというのである(三八〇三九頁)。廖氏のいう「功」が何を意味するかの問題はあるが、このような解釈もある程度成り立つと考える。しかし十歳によつて異動した者が「將軍史」「校尉史」であることからすれば、十歳による異動の対象は將軍府・校尉府に属した者のみに限られ、候官など都尉府に属する者は、その対象とはならなかったとも考えられるのではなからうか。¹⁹⁾

いずれにしても表二に見える十歳によつて長吏に異動した者は、いずれも前職は属吏と考えられる。しかしその官秩はにわかには確定できない。そこで、功次と同様の異動傾向を示すとすれば、その官秩は將軍史が二百石、校尉史が百石ということになるう。もつともこれは、功次の異動傾向との同一性がいえなければ意味を持たなくなるが、將軍が三公に並ぶ存在であり、一方校

表三 察挙科目関係

| 通番 | 現 職 | 官秩 | 前 職 | 官秩 | 異動理由 | 該当記載 |
|-----|------|------|-----------|------|----------|---------|
| 076 | 費長 | 400 | 故広邑長 | 300 | 以廉遷 | 3A-2-14 |
| 077 | 即丘長 | 400 | 故不夜長 | 300 | 以廉遷 | 3A-3-4 |
| 078 | 蘭旗相 | 400 | 故丹徒丞 | 300 | 以廉遷 | 3B-2-7 |
| 079 | 海西右尉 | 400 | 故海塩丞 | 300 | 以廉遷 | 3A-1-13 |
| 080 | 厚丘長 | 400 | 故丞相属 | 200 | 以廉遷 | 3A-3-16 |
| 081 | 容丘相 | 400 | 故丞相属 | 200 | 以廉遷 | 3B-2-17 |
| 082 | 武陽相 | 300 | 故東郡大守文学卒史 | 100 | 以廉遷 | 4A-1-7 |
| 083 | 新陽相 | 300 | 故河内大守文学卒史 | 100 | 以廉遷 | 4A-1-9 |
| 084 | 胸邑左尉 | 300 | 故東郡大守文学 | 100 | 以廉遷 | 3A-2-4 |
| 085 | 戚右尉 | 300 | 故大守属 | 斗食 | 以廉遷 | 3A-2-9 |
| 086 | 塩官長 | 300 | 故都尉属 | 斗食 | 以廉遷 | 4A-1-11 |
| 087 | 胸邑右尉 | 300 | 故相書佐 | 佐史 | 以廉遷 | 3A-2-5 |
| 088 | 襄賁左尉 | 300 | 故相書佐 | 佐史 | 以廉遷 | 3A-2-12 |
| 089 | 蘭旗丞 | 200 | 故亭長 | 佐史 | 以廉遷 | 3B-2-8 |
| 090 | 下邳右尉 | 400 | ……従史 | ? | 以廉遷 | 3A-1-9 |
| 091 | 臨沂右尉 | 200 | 故孝者 | (郷官) | 以孝廉遷 | 3B-1-18 |
| 092 | 郷令 | 1000 | 故博陽令 | 600 | 以秀才遷 | 3A-1-1 |
| 093 | 戚令 | 600 | 故揚州刺史從事史 | 100 | 以秀才遷 | 3A-2-6 |
| 094 | 襄賁令 | 600 | 故青州刺史從事史 | 100 | 以秀才遷 | 3A-2-10 |
| 095 | 臨沂長 | 300 | 故相守史 | 斗食 | 以挙方正除 | 3B-1-15 |
| 096 | 司吾長 | 400 | 故孝者 | (郷官) | 以宗室子挙方正除 | 3B-1-8 |

尉の官秩が比二千石と將軍に比べて低いことからすると、このような属吏の官秩の差異もある程度考えられるのではなからうか。

(二) 察挙科目関係

次に察挙科目関係の異動理由によつて長吏に異動した例を、表三として掲げておこう。これについては西川B論文でかなりの紙幅を使つて述べたので、ここでは若干の補足にとどめておきたい。

まず制科関係の察挙が行われた年次について考えておこう。三・四号木牘で制科の察挙科目と考えられるのは秀才(92・94)と方正(95・96)であるが、秀才については西川B論文で述べたように成帝期には常科として機能していた可能性が高い。事実『漢書』卷一〇成帝紀には、具体的に秀才(茂材・茂才)の察挙を命じた詔はない。そこで方正察挙に関する詔が発せられた時期を

成帝紀で確認すると、建始二年(前三一)二月、同三年(前三〇)一二月、元延元年(前一二)七月の三度ある。三・四号木牘で方正に察挙された者(95・96)が、三度のうちどれで察挙されたかは情報不足で確認できないが、当該木牘が前一〇年前後に作成されたとすれば、元延元年の察挙の可能性が高いとはいえそうである。ただ他の二度の方正察挙によって察挙可能性も完全に排除できないから、李解民氏のようにこの一事のみをもって三・四号木牘の作成の上限を元延元年とする(六二頁)のは、甚だ危険だと考える。何故なら、筆者が以前に行った当該木牘の作成時期の考証のように、長吏の出身郡県の表記から、その作成時期は最大で鴻嘉四年(二七)から元延二年(一二)の間の可能性があるからである。そうすると方正察挙の時期も、建始二年ないし同三年の可能性も視野に入れないなら⁽²⁴⁾ない。

次に前職のうち、西川 A・B 論文では取り上げなかった90の「従史」について考えておこう。これは恐らく属吏だと考えられるが、前半の記載が不明で所属官府が判明しない。廖伯源氏は、これを州の「従事史」の略だと考えているようだ(二一九頁)が、李解民氏が指摘するように「従史」という存在があった(六〇頁)。それは、李氏が引く『漢書』卷八一匡衡伝の「丞相匡衡 従史を遣わして僅に之かしめ、還す所の田租穀千餘石を収取して衡の家に入る」という史料によって明らかであるが、それによって李氏のように従史が丞相の属吏だとは断言できない。何故なら従史は、他の官府にも存在したからである。例えば『漢書』卷五八児寛伝には、彼が廷尉府の属吏であったときに「除されて従史と為」っているし、また同卷九二游俠伝の陳遵伝にも、彼が河南太守の時に「従史を遣わして西せしめ」ようとしている。このように丞相府以外の中央官府や郡府などにも、従史が存在している。その職掌は、児寛伝の師古注によると「従史なる者は、但只だ官僚に随いて、文書を主らず」とあり、これが果たして当を得た解釈であるかは判断できないが、仲山茂氏は、以上のことから「従史は必要に応じて外部に派遣される属吏であつたのだろう」と解釈する⁽²⁵⁾。

表四 捕斬関係

| 通番 | 現 職 | 官秩 | 前 職 | 官秩 | 異動理由 | 該当記載 |
|-----|------|------|----------|-----|------------|---------|
| 097 | 下邳令 | 1000 | 故長沙内史丞 | 600 | 以捕羣盜尤異除 | 3A-1-6 |
| 098 | 下邳丞 | 400 | 故豫州刺史從事史 | 100 | 以捕格山陽亡徒将率 | 3A-1-7 |
| 099 | 山郷相 | 300 | 故亭長 | 佐史 | 以捕格不道者除 | 3B-3-11 |
| 100 | 戚左尉 | 300 | 故仮亭長 | 佐史 | 以捕格不道者除 | 3A-2-8 |
| 101 | 利成左尉 | 200 | 故畜夫 | 斗食 | 以捕斬羣盜尤異除 | 3A-3-14 |
| 102 | 開陽右尉 | 200 | 故游徼 | 斗食 | 以捕羣盜尤異除 | 3A-3-3 |
| 103 | 山郷丞 | 200 | 故亭長 | 佐史 | 以捕格不道者除 | 3B-3-12 |
| 104 | 利成右尉 | 200 | 故亭長 | 佐史 | 以捕格山陽亡徒尤異除 | 3A-3-15 |
| 105 | 繪左尉 | 200 | 故亭長 | 佐史 | 以捕格山陽賊尤異除 | 3B-1-3 |
| 106 | 平曲丞 | 200 | 故亭長 | 佐史 | 以捕格羣盜尤異除 | 3B-1-6 |
| 107 | 承丞 | 200 | 故督盜賊 | ? | 以捕斬羣盜 | 3B-2-2 |

ここでは従史の職掌を仲山氏のように考えるとして、それでは90の従史はどの官府に所属する属吏だったのが問題になるが、丞相属(80・81)と同様に四百石の長吏に就任していることからすると、丞相府だとは断定できないが、二百石クラスの公府の属吏だと考えてほぼ間違いのないのではなからうか。

(三) 捕斬関係

次に捕斬関係の異動理由によって長吏に異動した者を、表四として掲げておこう。これについても西川B論文で具体的に検討したので、ここでは察挙科目関連の場合と同様、これまで触れられなかった点を若干補足しておこう。

まず、これまで捕斬として一括して扱ってきたが、表四を見ても明らかなように「捕斬」以外に「捕」「捕格」と記される場合があり、数的には「捕格」という表現が多い。⁽²⁶⁾ また文献でも「捕格」(『漢書』卷九〇酷吏伝の尹賞伝など)や「追捕」(『漢書』卷七六張敖伝など)あるいは「逐捕」(『漢書』成帝紀など)というように、その表現は一定しない。

しかしいずれも、盗賊や反乱者など反政府活動を行った者を逮捕・斬殺したことを意味することに違いはない。そこで筆者は、『漢書』成帝紀の永始三年(前一四)一二月の条に、山陽鉄官徒の蘇令らの反乱鎮圧に功

續のあつた汝南太守の嚴詔が、蘇令らを「捕斬」したことによつて大司農に遷つたことや、居延新簡EPF二・二二二に「●捕斬匈奴反羌購賞科別」という表題簡があり、それに続く簡に「捕」や「斬」の場合の具体的な褒賞の規定が記されることから、異動の際の表現としては「捕斬」というのが一般的ではなかつたかと考えて、一応「捕斬」によつてこれを代表している。

その名称の適否はともかくとして、西川B論文で述べたように捕斬による異動では、具体的に捕らえた対象が明示されている。表四では示せなかつたが、その捕らえた対象と彼らの出身郡県との間には、一定の相關関係が見出せる。それが最も端的に表れているのが「不道者」の「捕格」にかかわつた者たちで、彼ら(99・100・103)はいずれも「魯国魯」の出身である。また「山陽亡徒」や「山陽賊」の「捕格」にかかわつた者は「沛郡」(98)と「南陽郡」(104・105)、そして「羣盜」の逮捕にかかわつた者は「六安国」(97・101)と「蘆江郡」(107)それに「琅邪郡」(102・106)である。97を除くといずれも属吏で、出身の州・郡・県に勤務していたことは間違ひなく、いずれも各地域で発生した同じ事件鎮圧の功績によつて、長吏に異動したと考えることができる⁽²⁷⁾。ただし「羣盜」の場合は、六安国・蘆江郡の地域と琅邪郡では地理的にかなりの距離があるので、別の事件と考える方がよからうし、また97は長沙国の内史丞であつたことから、あるいは六安国・蘆江郡の地域の「羣盜」が近隣の長沙国まで及んだのかもしれない。

以上のように考えると、李解民氏のように、捕斬によつて長吏に異動した者すべてを永始三年の山陽鉄官徒の反乱と関連させる(六五頁)必要もなからう。なお李氏は、この異動理由に「尤異」が付くのに注目して、これを察挙科目の尤異と考える(六三頁)。また劉軍氏は、理由は不明であるが察挙科目の治劇であるとする(五〇頁)。しかし西川B論文で指摘したように、これは有事に際しての論功行賞的な異動理由と考えられ、特に捕斬による異動の対象の多くが、察挙によつて長吏に異動する可能性がほとんどない県の斗食以下の属吏であることからすると、その察挙を命ずる詔もないことから、強いて察挙との関連を想定する必要はないと考える。

(四) 請詔関係

次に請詔関係で長吏に異動した者を、表五として掲げておこう。この異動理由は官僚からの異動が多く、西川B

表五 請詔関係

| 通番 | 現 職 | 官秩 | 前 職 | 官秩 | 異動理由 | 該当記載 |
|-----|------|-----|--------|-----|------|---------|
| 108 | 部郷相 | 300 | 故侍郎 | 400 | 以請詔除 | 4A-1-3 |
| 109 | 東安相 | 300 | 故郎中騎 | 300 | 以請詔除 | 3B-3-13 |
| 110 | 合郷長 | 300 | 故郎中騎 | 300 | 以詔除 | 3B-1-19 |
| 111 | 戚丞 | 300 | 故廷史 | ? | 以請詔除 | 3A-2-7 |
| 112 | 下邳左尉 | 400 | 故復土候□□ | ? | 以請詔除 | 3A-1-8 |

論文でも述べたように官僚からの異動の場合どの異動理由によっても異動傾向が変わらないことから、他の異動理由との比較が困難で、これまで十分に分析できなかった。またそもそも「請詔」とは何を意味するのかも、もう一つ不明である。そこでまずは、請詔の意味を考えておこう。

110の「以詔除」を除くとすべてが「以請詔除」となっているから、恐らく110も「請」字が抜けているものと考えられ、それは「詔を請うを以て除さる」と読むのだろう。そうすると、誰が「詔を請う」のかが問題となるが、恐らく廖伯源氏(三七頁)や劉軍氏(五〇頁)が指摘するように、高級官僚が人材を皇帝に推薦することをいうのであり、李解民氏のいうような自薦を意味する(六六頁)のではなからう。ただ劉氏や李氏が根拠とする『漢書』卷八宣帝紀・黃龍元年(前四九)二月の詔は、請詔の意味を知る手がかりとはなるが、異動理由としてのその内容を知ることとはできない。この他に文献には「詔除」の例もあるが、これもその内容を十分にうかがい知ることとはできない。そこでここでは廖・劉両氏の指摘に従い、請詔とは官僚からの推薦、すなわち「表薦」を指すものと考えことにしたい。²⁹⁾そして請詔がこのような性格の異動理由であれば、それは定期的に行われるものではなかったであろう。³⁰⁾

次に請詔関係の前職の中で、これまで検討できなかった111の「廷史」と112の「復土候□□」を分析しておこう。

まず廷史について、廖伯源氏は県の官署を「廷」ということから県の属吏だと解釈する（一三八頁）が、これは明らかに誤りであり、李解民氏が指摘するように廷尉の属吏の「廷尉史」である（六六頁）。何故なら李氏が引く路温舒の例で見ると、『漢書』卷五一本伝で「守廷尉史」となっている職名が、『漢書』卷二三刑法志では「廷史」と記され、刑法志の師古注に引く如淳の言として「廷史は、廷尉史なり」とあるからである。このように廷史と廷尉史が同一であることを物語る史料は李氏が挙げる路温舒の例以外にもあり、義縱と王温舒は、いずれも『史記』卷一二酷吏伝では「廷史」と記されるのに対して、『漢書』酷吏伝では「廷尉史」と記される。これらの例は、如淳の言を裏付けるものとなる。

廷史が廷尉史だとして次に問題になるのは、その官秩である。李氏は『続漢書』百官志二廷尉の条に引く『漢官』に「十六人二百石廷史³²」とあることから、その官秩を二百石とする。確かに『続漢書』や『漢官六種』の標点本では「廷史」の後で区切られているが、ここで切るのには若干問題がある。何故なら、右の文に続いて「文学十³³六人百石」とあり、「廷史」を前に掛けずに、この「文学」に掛けて「廷史文学」とすることも可能だからである。さらに三・四号木牘に二百石長吏に異動した廷尉史の例¹²があることからすると、その官秩は百石と考えるのが妥当だろう。このように廷史の官秩が百石であれば、属吏が請詔によって長吏に異動する場合、廉による異動と同様に、二段上層の官秩の官に異動したといえる。

次に「復土候□□」について考えておこう。これは後半の文字が不明で、四百石長吏に異動しているものの、属吏か官僚なのか判明しない。なお「復」字は『報告書』釈文では偏の部分不明であるが、李解民氏が理由は不明であるものの「復」と考えて問題ないとする（六六頁）のに従った³⁴。

ところで「復土候」という官名は文献には見えないが、李氏が指摘するように（同右）、『史記』『漢書』の文帝紀に見える「復土將軍」や、『漢書』卷七八蕭由伝や卷九二游侠伝の原涉伝に見える「復土校尉」と関連すると考え

ると、それは皇帝や皇后・皇太后などが死亡した時に、その埋葬にかかわる臨時の官だったと考えられる。何故なら文帝紀の場合は、文帝が亡くなった時に張武が復土將軍として文帝埋葬のを行ってゐるし、また蕭由の場合は哀帝が亡くなった時、そして原涉は元后が亡くなった時に、それぞれ復土校尉になってゐるからである。³⁵ そうすると、成帝期にこのような埋葬が行われる可能性としては、永始元年(前一六)八月に宣帝皇后の王氏が亡くなった時が挙げられる(『漢書』成帝紀および同卷九七外戚伝上)。

「復土候□□」が、このように皇帝などの埋葬にかかわる復土関係の職で臨時に置かれたものだとなれば、それは官僚の手足となつて働く属吏の可能性よりも、実際に埋葬を指揮する官僚の可能性の方が高いのではなからうか。何故なら文帝紀によると、実際に働くのは近辺から徵発された大量の卒であり、それを指揮するのが復土関係の職だったと考えられるからである。³⁶ そうするとその官秩は、官僚の異動の原則からいって三百石ないし比四百石だったと考えられる。

復土関係の職が右に述べたように皇帝などの埋葬にかかわる職だとすれば、その埋葬は首都の長安近辺で行われるのだから、それは中央官といえなくもない。このことは、請詔によつて異動した他の例がいずれも、侍郎・郎中騎や廷尉の属吏という中央の官僚・属吏であることから推測できる。そもそも請詔が官僚からの推薦による異動だとすれば、それに与る機会中央官府の官僚や属吏に多かつたといえるのではなからうか。すなわち、請詔とは、中央官府の官僚・属吏を高級官僚の推薦によつて異動させる異動理由だったと考えられるのである。³⁷

(五) 国人・貶秩

これまで検討してきた異動理由はいずれも昇進を意味したが、表六に一括して掲げた国人・貶秩は、西川 A・B 論文でも触れたように昇進を意味しない異動理由である。

表六 国人・貶秩

| 通番 | 現 職 | 官秩 | 前 職 | 官秩 | 異動理由 | 該当記載 |
|-----|-------|------|---------|------|-------|---------|
| 113 | 山郷侯家丞 | 比300 | 故郎中 | 比300 | 以国人罷補 | 4A-2-7 |
| 114 | 部郷丞 | 200 | 故貶秩東昌相 | 300? | 貶秩 | 4A-1-4 |
| 115 | 昌慮左尉 | 200 | 故貶秩郎中 | 比300 | 貶秩 | 3B-2-5 |
| 116 | 良成尉 | 200 | 故貶秩山□□□ | ? | 貶秩 | 3B-2-13 |
| 117 | 平曲侯国尉 | 200 | 故貶秩□□ | ? | 貶秩 | 3B-3-3 |

まず事例の多い貶秩の場合を考えておこう。例えば114の「故貶秩東昌相」のように、貶秩の場合は、三・四木牘で通常異動理由の記される箇所ではなく、前職の箇所に記される。しかし異動理由の箇所に記載がないことからすれば、この「貶秩」が異動理由となつたと考えられ、114の場合は東昌相から貶秩よつて部郷丞に異動したと考えられるのである。そしてこの貶秩とは、例えば卜式が上卿の御史大夫から二千石の太子太傅に「貶秩」されたように(『漢書』卷五八本伝および『史記』卷三〇平準書)、文字通り官秩を貶され、その官秩に見合う官職に降格されることを意味した。そうすると三・四号木牘の事例の場合、前職が不明な例も含めてすべて二百石長吏に異動しているから、彼らは少なくとも百石以下の属吏とは考えられず、官僚であることは間違いない。

そこで問題になるのは、二百石長吏に貶秩されるのは、どの官秩の官までかということである。例えば文献には「貶秩一等」(『漢書』卷七六趙広漢伝、同卷七二龔勝伝)という表現が見られるから、あまり高い官秩の官僚が二百石長吏に貶秩されたとは考えられない。表六では、比三百石の官秩の郎中(115)や三百石から千石までの官秩が考えられる侯国相(114)があるから、二百石長吏に貶秩される官秩の上限は、一応千石だと考えられる。しかし比六百石と四百石間で上級官僚と下級官僚に分かれるという福井重雅氏の指摘³⁸⁾に注目すれば、二百石長吏への貶秩対象は四百石の官僚までだったと考えるのが妥当ではなからうか。ただこのように考えると、西川B論文で想定したような官秩の層でいえば、四百石の官僚は二層下がった官秩の長吏に異動したことになり、「貶秩一等」とはいえないようにも見えるが、比較的官秩の低い下級官僚が貶秩される場合は、一律に二百石の官に異動す

るのが原則だったと考えられるのではなからうか。このように考えると、前職が判明しない二例の官秩も、比三百石以上四百石以下だったとはいえる。⁴⁰⁾

次に国人の場合を考えてみよう。これは113の一例のみであり、しかもかなり特殊な事情があったと考えられる。何故なら、これは「定陶国」という王国の出身で、普通に考えれば『漢書』卷七十二龔勝伝にいう「王国人は宿衛するを得ず」という原則によって、最初から郎中に就任する可能性はないと考えられるからである。三・四号木牘に見える長吏でも王国出身の91の場合は、郎官に就官するはずの孝廉に察挙されながら長吏に就任しており、しかも113と同じ「定陶国」の出身であることからすれば、この二例の間には何らかの事情の相違が想定される。ところが先行研究では、この点はあまり意識されておらず91と113を同列に扱って評価しており、廖伯源（二八六～一六七頁）・李解民（六七～六八頁）の両氏は、多少評価は異なるものの、右の龔勝伝と次に具体的に検討する『漢書』卷七一彭宣伝の記事を根拠に、成帝から哀帝にかけての時期にのみ「王国人不得宿衛」という原則が適用されたと考え、確かに彭宣伝の記事は、中央官僚の時（廷尉と左將軍の二度）に王国人を理由に解任されたようだから、113の例と符合する面がある。しかしこの記事が、果たしてそのまま「王国人不得宿衛」の根拠となるか問題がある。

彭宣伝によって彼の経歴を確認すると、博士・廷尉・大司農・光祿勳・右將軍・左將軍・光祿大夫・御史大夫・大司空と、王国人の就任できないはずの中央官僚を歴任しており、また本伝の師古注に引く李奇の言のように「王国人は京師に在るを得ず」というのであれば、廷尉就任前に就いた右扶風も問題となろう。ところがここに挙げた官が彼の就任した官のほとんどであり（他には東平太傅と太原太守に就任）、しかも王国人が問題になったのは、廷尉に就任してから三年後、そして左將軍に就任してから一年後というように、就任後ある程度の時間を経てからのことである。ここには、原則を超えた何らかの事情があると考えざるを得ない。それは、哀帝が「丁・傅をして爪牙の官に処らしめんとして、乃ち（左將軍彭）宣を策免し」たこと（本伝）に端的に現われていると考える。この時彭

宣が問題にされたのは、①王国人は宿衛できない、②王国出身の將軍は兵馬を典れない、③彼の子供が淮陽国王の娘を娶ったなどであるが、策免の最大の要因は、哀帝が母の丁氏一族と皇后の傅氏一族を「爪牙の官」としようとすることにあつたのであり、右に挙げた三つの理由は策免のための口実の可能性が高い。ここにはかなり強い政治的な意図が働いていることは確実で、廷尉を解任された背景にも恐らくこのような事情があつたのではなからうか。このように考えると、李解民氏がいうように「随時に故事成例が援引された」（六八頁）とも解釈できようが、そもそも王国人が「宿衛」に当たれないのであれば、その総帥たる光祿勳に就任できるはずがない。ところが、『漢書』百官公卿表によれば彭宣の光祿勳在任期間は六か月と短いものの、この時に彼が王国人であることが問題になつた様子はない。すなわち、彭宣伝の記事からは、制度としての「王国人不得宿衛」の問題を検討するのは危険だと考えるのである^①。

以上からすると、王国人の問題を直接に物語るのは『漢書』龔勝伝の記事のみということになる。この記事では、龔勝が三度も孝廉に察挙されながら「王国人」たることによって「宿衛」できず、長吏に就任したことになっている。そうするとこの「宿衛」とは、孝廉に察挙された者が通常就官する郎中ということになるのではなからうか。すなわち「王国人不得宿衛」という原則が適用されるのは原則として、皇帝の護衛官として「諸殿門に宿衛する」郎官（郎中・侍郎・中郎など）のみだったのであり、その他の官、中でも九卿以上の官僚は、光祿勳でも特に問題はなかつたと考えられるのである。このように考えれば西川B論文で述べたように、113の例は出身郡県的一般郡から王国への変更に伴い、その時点で「王国人不得宿衛」の原則が適用されて郎中から長吏へ転出したのだと考えるのが最も妥当だろう。すなわち、113の例は一般郡の王国への変更という特殊事情による異動であり、このような異動は通常はなかつたと考えられるのである。そうすると、廖伯源氏や李解民氏のように「王国人不得宿衛」の適用される時期を限定して考える必要もないであろう。

表七 情報不足の例

| 通番 | 現 職 | 官秩 | 前 職 | 官秩 | 異動理由 | 該当記載 |
|-----|-------|------|-------------|------|------|---------|
| 118 | 海西左尉 | 400 | 故大□□ | ? | 以□遷 | 3A-1-12 |
| 119 | 南城侯家丞 | 比300 | 故侯行人 | 100 | ? | 4A-2-5 |
| 120 | 都平丞 | 200 | 故□事□廉丘右尉 | 200? | ? | 3B-3-16 |
| 121 | 費丞 | 200 | 故廷尉史 | ? | ? | 3A-2-15 |
| 122 | 利成丞 | 200 | 故罷将戸車□□□□令史 | 斗食 | ? | 3A-3-13 |
| | | | 水衡都尉書佐 | 佐史 | ? | |

(六) その他

以上によつて、三・四号木牘で異動理由の判明する長吏の異動についての分析は終えた。ただ異動理由が判明しないものでも、これまでの分析から、ある程度まで異動傾向が推測できるものがある。それが表七に掲げた五例であり、これらについて若干の検討を加えておこう。

まず118は、前職が「大□□」⁽⁴²⁾という具体的な官名が不明なもので、しかも異動理由も「以□遷」とあつて不明である。しかし異動理由については、西川B論文で指摘したように「遷」字が付く異動理由が功次・廉・孝廉・秀才に限られるとすれば、不明の一字には「功」または「廉」が入ることは間違いない。そこで、例えばそれが「功」だとすれば、四百石長吏に異動しているから、他の功次による異動例からいえば官秩は三百石ないし比四百石ということになる。この官秩は一般的には官僚であるが、公府の属吏でも可能性がある。ただ三・四号木牘では功次によつて長吏に異動した公府の属吏の例がないから、官僚の可能性が高いと考える。一方「廉」であれば前職は官僚と属吏の両方の可能性がある。例えば官僚であれば、功次の場合と同様の三百石ないし比四百石の官秩ということになるし、また属吏であれば丞相属(80・81)と同一の官秩の二百石となろう。

次に119の場合、写真で見ても異動理由の箇所には何も記されていない。このように異動理由の箇所に記載がないのは、前に触れたように一般には貶秩の場合であろうが、

百石の侯行人から比三百石の侯家丞に異動したのだから、これは貶秩とは考えられない。三・四号木牘の異動傾向から見ると、このような異動は功次によるものであり、この場合「以功遷」など功次関係の異動理由が抜けた例と考えられる。また121の場合も、前職の「廷尉史」の官秩が本稿で述べたように百石だとすれば、その異動理由は功次となる。ちなみに121の場合、写真では読み取れないが、何らかの異動理由が記されていた可能性がある。

次に122の場合を取り上げよう。これも右の119の例と同様に、写真を見ても異動理由の箇所に何らかの記載があった可能性はない。またこの前職の箇所には不明の部分があり判断に困る点もあるが、「令史」と「書佐」が記されているから、少なくともこの二職を前職としていたことは確実であろう。ただ三・四号木牘では前職がこのように二職以上記される例は他になく、異動直前の職が何であったのかわからない。例えばここにはこの二職のみが記されているとして、二つを兼任していた可能性もあるが、それぞれ記載の順に歴任した可能性もある。いま前職の最初の「罷」字が罷免の意味だと考えると、斗食の令史から降格によって佐史の書佐に就任し、その後長吏に異動したと考えられる。何故なら「罷」字を前職全体に掛けて、前職免職後に長吏に異動したと考えると、その前職がいずれにしても属吏であることから、降格によって長吏に異動するとは考えられないからである。しかし「罷」字が本当に罷免を意味するかもわからない。ここでは「書佐」の記載に注目して、他の異動傾向から功次による異動であり、119と同様に異動理由の記入漏れだと考えておく。何故なら122の前職の後半は明らかに中央官府の属吏であり、西川B論文で述べたように、このような場合は斗食以下の官秩の属吏でも長吏への異動機会があったと考えられるからである。

最後に120の場合は、西川A論文でも述べたように、前半の不明文字を含む三文字をどのように解釈すればよいのか判断できないので、確実な答えを出すことはできない。ただ「廩丘右尉」が本官だとすると、その官秩は二百石から四百石であり、それが二百石長吏に異動しているのだから、同一官秩の長吏への異動、あるいは降格(貶秩)と

いうことになる。あるいは、異動理由の箇所に記載がないことからすれば、貶秩に類する異動なのかもしれない。

さて以上のように考えると、異動理由が不明の五例の中で少なくとも119・121・122の三例が功次によって異動したと考えられるし、また118は功次または廉によって異動したと考えられる。これを表一に掲げた七三名に加えると、功次によって異動した者は合計七六名または七七名となる。この数字は、今回取り上げた一二二名に占める割合でいえば六〇%を超えることになり、また尹灣漢墓簡牘作成当時に東海郡に存在した一四五名の全長吏に占める割合で見ても五〇%を超える。この傾向が全国にも適用できるとすれば、少なくとも半数の長吏は功次によって異動したと考えられるのである。ただこの数字は、前職を官僚と属吏に分けたものではない。そこで次に、西川A・B論文と同様の視点で本稿で分析した事例を加えれば、どのようなことがいえるかを検討しておこう。

二 長吏任用の特色・再論

本稿で取り上げた一二二例を異動理由ごとに、官僚と属吏（侯僕以下の侯家臣を含む）、そして西川A論文で仮に属吏に含めておいた孝者を郷官として分けると、表八のようになる。なお不明の項目に掲げた二例は表七の118と120であり、本稿で述べたように、彼らは結局情報不足で前職の官秩・異動理由の推定が十分にできないが、官僚の可能性が高いと考えて一応官僚に含めてある。ただし以下の考察では、この二例を省いて一二〇例で考えることにしたい。

この一覧表は、西川A論文で掲げた一覧表と全体的な傾向では変わらないが、官僚の事例（九例増加）が属吏の例（五例増加）よりも増え、また属吏に含めていた孝者を別に示したため、全体に占める官僚と属吏の割合は、前者が三〇%、後者が六八%強と、官僚からの異動例が四%ほど高くなる。しかし属吏から異動した長吏が多いことには変わりなく、しかもその中で功次によって異動した者が六七%と、西川A論文で示した数字より若干多くなる。こ

表八 異動理由別前職一覧

| | 功次 | 十歳 | 廉 | 孝廉 | 秀才 | 方正 | 捕斬 | 請詔 | 国人 | 貶秩 | 不明 | 合計 |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|-------|
| 官僚 | 21 | 0 | 4 | 0 | 1 | 0 | 1 | 4 | 1 | 4 | (2) | 36(2) |
| 属吏 | 55 | 2 | 11 | 0 | 2 | 1 | 10 | 1 | 0 | 0 | 0 | 82 |
| 郷官 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 |

れは全体(一二〇名中五五名)からいえば四六%弱となり、長吏の半数近くが属吏から功次によって異動したことになるのである。これによってもやはり、前漢後半期の成帝期においても長吏は、属吏を前職として功次によって昇進した者が多かったといえる。

ところで属吏が功次によって長吏に異動する場合、西川A論文で指摘したように比三百石の侯家丞か二百石長吏であり、またこの二つの官秩の官は西川B論文で述べたように官僚の官秩の層でいえば最も低い層だった。三・四号木牘ではこの二つの官秩の官が八四(比三百石が一八、二百石が六六)存在するが、ここでの分析の対象とする一二〇例の中では、比三百石の官が一六、二百石の官が五五の合計七一となる。この数字は、属吏から功次で異動した五五例よりも多くなが、それは西川A・B論文ですでに述べたように、この二つの官秩の官に功次以外の異動理由によって異動した者が存在するからである。いま功次によって異動した属吏の数を確認すると、比三百石の官には一五名、二百石の官には四〇名となり、各官就任者に占める割合でいえば、前者が約九五%、後者が約七三%となる。この割合(特に後者の割合)を高いと見るか低いと見るかは問題も残るが、功次以外のこの官秩の官への異動は、かなり特殊なものだったことからすると、必ずしもその割合が低いとはいえないと考える。

まず官僚からの異動を見ておくと、貶秩によって二百石長吏に異動した例(表六参照)があるが、これは時として起こる可能性があり、本稿で述べたように四百石以下の官秩の官僚は原則として二百石の官に貶秩されたとすれば、二百石長吏の一部分はこの貶秩によって異動した官僚によって占められたと考えられる。しかし比三百石の官に異動した国人(表六参照)は本稿で述べたように特殊な異動理由であり、このような異動はほとんど考えられないであろう。また

二百石長吏に異動した者の中には西川A論文で指摘したように、一時的に官秩を三百石に上げたと考えられる郎中からの功次による異動(14)があり、これは二百石長吏への異動とはいえない。そうすると官僚からの二百石長吏への異動は、ほぼ貶秩に限られるといえる。

一方、属吏や郷官が功次以外の異動理由で二百石長吏に異動する場合を考えておこう。まず孝者が孝廉によって二百石長吏に異動したのは、西川A論文で述べたように、その出身が王国だったことによる特殊な事例と考えられる。次に属吏の場合、十歳と廉で二百石長吏に異動したのが各一例あり、また捕斬で七例ある。このうち十歳と捕斬は、西川B論文で指摘したように不定期の異動だと考えられ、特に捕斬に見える属吏の多くは長吏への昇進の機会が容易になかった県の斗食以下の属吏である。そうすると廉によって二百石長吏に異動した亭長の例も含めて、同じ二百石長吏への異動といっても、その持つ意味は他の属吏の功次による異動とは異なり、それは、西川B論文で述べたように大幅な昇進と考えなければならぬだろう。逆にいえば、県の斗食以下の属吏を除く百石クラスの

属吏は、功次以外の異動理由では基本的に二百石または比三百石長吏に異動することがなかったといえる。以上のことから考えると、二百石あるいは比三百石の長吏は、通常は功次によって異動してくる百石クラスの属吏によって占められ、そこにさらに貶秩によって降格された官僚と、特殊な異動によって大幅な昇進をした昇進機会の少ない属吏が加わったといえよう。⁽⁴⁸⁾

さて、二百石・比三百石長吏には功次によって昇進した属吏が就任するのが一般的だったとして、その他の官秩の長吏には、どのような前職の者が異動したのだろうか。その状況を示したのが表九である。この表を見るとまず、三百石長吏を境界として、官僚を前職とする者と属吏を前職とする者の割合が変化しているのに気付く。これが

表九 就任官秩別前職一覧

| 官 秩 | 類(欄) | 官僚 | 属吏 | 郷官 |
|------|--------|----|----|----|
| 千石 | 4(4) | 4 | 0 | 0 |
| 六百石 | 3(2) | 0 | 2 | 0 |
| 四百石 | 25(16) | 11 | 4 | 1 |
| 三百石 | 29(27) | 15 | 12 | 0 |
| 比三百石 | 18(16) | 1 | 15 | 0 |
| 二百石 | 66(55) | 5 | 49 | 1 |

何を意味するのかを、次に検討しておこう。なお表で定員および判明として掲げた数字は、前者が尹湾二号木牘に記される長吏の官秩に基づいたその官秩ごとの分布数であり、後者は今回の分析で用いた長吏の官秩の分布数である。

まず官僚が異動する場合、その官秩が比二百石以上であることからすれば、昇進の場合一段上層の官秩の官に異動するのであるから、基本的には三百石以上の官秩の官に就任することになる。ただそこに、国人という特殊な異動や貶秩による降格が加わることによって、比三百石以下の官に異動する例も存在するのである。すなわち、官僚からの異動の場合、昇進であれば三百石以上の官秩の官に異動するのである。しかしこのように考えても、何故官僚からの異動が三百石長吏ないし四百石長吏に集中するのかを考えなければならぬ。三・四号木牘では、この二つの官秩の長吏への異動が二六例と、官僚からの異動全体(三六例)の七二%を占めるのである。この一因は、千石・六百石長吏が合計七なのに対して、この二つの官秩の官が五四(三百石が二九、四百石が二五)と、比三百石・二百石の官に次いで多くを占めることにあると考えられる。すなわち、官僚が異動する長吏としては、三百石および四百石の官秩の方が、六百石以上の官秩よりも圧倒的に多かったのである。その結果、長吏に異動する官僚の官秩は、三・四号木牘にも現われているように、比四百石以下の低い官秩に限られることになる。

ところで、長吏の官秩構成で六百石以上の官秩の官がかなり限られるということは、四百石長吏に限っても、上位の長吏への異動機会がかなりの狭き門だったことを意味する。ただ中央官府にも比六百石を含む六百石クラスの官があり、その官への異動の機会もあった。しかしそれも『続漢書』百官志を見ると、中には議郎のように「無員」とされる官もあったが、多くは定員一人の令に限られたから、かなり限られたものとなろう。すなわち官僚は、四百石の官秩まで昇進した段階で、かなりの者の昇進が頭打ちとなったと考えられるのである。多くの官僚は四百石の官秩に至るまでに、死亡あるいは貶秩などによって淘汰されたのではなからうか。

このように考えると三百石・四百石長吏というのは、官僚の場合は、比較的低い官秩の者が昇進していく官であるとともに、その時点で多くの者の昇進が止まる官でもあったといえよう。そのような官に、功次以外の異動理由によって属吏から昇進してくる者が加わってくるのであるから、比三百石以下の官僚は、より昇進の機会が狭かったと考えられる。これは、属吏がたとえ功次によって二百石または比三百石長吏に昇進したとしても、多くの場合そこで昇進が止まったことを意味しよう。このようなことによって、文献で功次によって属吏から官僚へと昇進していった例が少なくなるのだと考えられる。それでは、属吏から三百石以上の官秩の長吏へ異動するのはどのような場合だったかを見ておこう。

属吏の場合、三百石以上の官秩の長吏に異動したのは一八例と、三・四号木牘に見える属吏全体（八二例）からすれば約二二％となる。そのうち、丞相属（80・81）と本稿で考察したように公府の属吏と考えられる従史（90）や將軍史（74）は、その官秩が官僚相当の二百石で、昇進に当たっては三百石以上の官に就任する可能性が高いと考えられるから、一般的な百石以下の属吏に限れば、三百石以上の長吏に就任したのは一七％程度となる。これは功次に比べればはるかに低い数字となり、属吏が直ちに三百石以上の官秩の官に異動することがいかに困難だったかを物語ると考える。

しかも注目すべきは、三百石以上の官秩の官に異動した属吏のうち約七二％（一八例中一三例。官秩二百石の属吏も含む）が、察举科目と考えられる廉・方正・秀才によって異動していることである。これは、属吏が三百石以上の官秩の長吏に異動する場合、通常は察举に限られたことを意味すると思われる。何故なら、三百石長吏への異動例が見られる十歳・請詔・捕斬という察举以外の異動理由は、西川B論文で述べたように不定期に行われるもので、かなり特例的な異動であつたと考えられるからである。例えば十歳による三百石長吏への異動の例は、將軍史という二百石の官秩の属吏だったことによるものと考えられ、百石クラスの属吏は校尉史が二百石長吏に異動したよう

に、通常は三百石長吏への異動はないと考えられる。また諸詔による異動は本稿で述べたように、中央官府の属吏（廷史）であることによる異動だと考えられ、すべての属吏には適用できず、またそれは不定期に官僚が人材を推薦するものであった。そして捕斬による異動は、西川B論文で述べたように論功行賞的な異動であり、特に通常では長吏への異動機会のないと考えられる亭長の三百石長吏への異動は、かなり特殊なものと考えられる。

このように属吏から三百石以上の長吏への異動が、主に察举によつて行われたとすれば、察举制度は、従来いわれるような比二百石以上の官僚に登用する制度ではなく、より限定して三百石以上の官僚に登用する制度だったことを表しているのではないかと考えられる。もちろんこのように考えると、一般に比三百石の郎中に登用する孝廉の位置付けが問題となるが、前漢時代には後漢時代ほど孝廉察举の例が文献には普遍的に見られないことからすれば、前漢時代には孝廉が察举制度として十分機能していなかった可能性がある。すなわち、孝廉察举によつて就官する郎中からの昇進ルートが、後漢時代ほど整備されていなかったのではないかと考えられるのである。ただこの問題は、孝廉察举の在り方や功次による昇進の位置付けを、前漢時代と後漢時代とで比較しなければならず、ここでは立ち入らず今後の課題としたい。

ところで、属吏の中で注目すべきは州の従事史である。彼らは他の属吏と同様の百石の官秩にもかかわらず、四百石(98)や六百石(93・94)の長吏に異動している。もちろん捕斬の場合は、それが論功行賞的な異動理由であることからすると、実際の功績に依じて比較的高い官秩の官に異動したともいえよう。しかし六百石長吏への異動の場合その異動理由が秀才であり、やはり西川B論文で述べたように、それが州から恒常的に人材を察举する常科の察举科目として機能していたとすれば、その察举権を有する州に所属する、従事史をはじめとする属吏が察举される可能性が高いといえよう。このことは、州の属吏が、他の地方官府の属吏よりも将来の昇進が有利だったということとを意味すると考える。何故なら、右の述べたように三百石・四百石の官秩の官は六百石の官に昇進する以前に、

かなりの者が淘汰されたと考えられるからである。すなわち、秀材に察挙されて六百石の官に異動することは、その淘汰を経ずに、より高い官秩の官への昇進が可能だったのである。

以上のことからすると三百石長吏は基本的に、前職の官秩が比三百石以下の官僚と、察挙によって一挙に昇進した属吏とが、相半ばする職だったといえよう。ただ三百石長吏あるいは四百石長吏は、そこで多くの者の昇進が頭打ちとなる官だとすれば、たとえ察挙によってこれらの官に就いたとしても、将来の昇進はかなり困難なものになったと考えられる。その意味では、西川 A 論文で察挙によってこれらの官に就任した属吏をエリート組と考えたが、あるいは秀材などによって六百石以上の官秩に就官した者のみをエリートと考えるべきかもしれない。しかし察挙によつて三百石以上の官秩の官に就官できたとすれば、少なくとも比三百石以下の官秩から三百石の官秩へ昇進する際の淘汰は免れるわけだから、察挙によつて三百石長吏に就官した者は、功次によつて比三百石以下の官秩の官に就官する属吏よりも、若干ながら将来の昇進が有利だったといえよう。

さてここで、残る孝者の場合を考えておこう。これは、官僚でも属吏でもない、いわゆる郷官であり、基本的には在野無官の者と考えてよからう。ただ彼らは、爵の賜与や徭役の免除など、一般民とは立場が若干異なる⁴⁹。また尹灣一号木牘でも、官僚・属吏とは別枠ではあるが、郷官が一括して記録されている⁵⁰。一般に察挙制度をはじめとする官僚の登用制度では在野無官の者もその対象となったと考えられるが、三・四号木牘の長吏就任者で官僚・属吏以外の者は、この郷官たる孝者のみである。そうすると基本的には在野の者でも官僚への昇進機会があるといつても、実際には孝者のように何らかの形で国家(郡)に把握されている者のみに、その機会が限られたのではないかと考えられる。

ところで孝者はいずれも、孝廉(91)と方正(96)という察挙科目を適用されて長吏に就任している。恐らく彼らは、属吏のように功次によつてその立場を昇進する機会がなく、察挙でしか昇進の機会がなかったのではなからうか。

ただ『漢書』卷八三薛宣伝には「功次もて稍遷して」頻陽令に異動した孝者の薛恭の例がある。ここには「未だ嘗て民を治めず」とあることから、薛恭は孝者から功次によつて県令まで昇進したとも考えられるが、これは酷吏の尹賞との関係で述べられていることから考えると、実務経験の豊かな尹賞との対比として薛恭の「孝者」たることが強調されているとも考えられる。そもそもこの記事には「稍遷」とあるのみで昇進過程が不明確となっているから、孝者からすべて功次によつて昇進したと考える必要もない。すなわち筆者は、薛恭は孝者から功次のみによつて県令に昇進したのではなく、孝者から察挙によるか、または一旦県の属吏となつてから、功次などによつて昇進したと考えるのである。^⑤ いずれにしても、在野の者にも官僚への昇進機会はあつたものの、それは郷官という特別の存在の方が有利であり、またその機会は基本的に察挙によつたと考えられる。ただ三・四号木牘の前職の大多數が官僚・属吏であることからすれば、郷官といえども在野の者が直接官僚へ昇進するのはかなり困難だつたといえよう。その意味でいえば、官僚へ昇進するにはまず属吏に採用されることが、ほとんど前提条件となつていたとも考えられる。

最後に本稿で述べたことを前提にして、三・四号木牘に見える長吏任用の事象を、紙屋正和氏による長吏任用の分析^⑥との関係で、もう一度考えておこう。西川A論文でも述べたように、文献に見える事例を中心に分析した紙屋氏の研究では、尹湾二号木牘に見えるような大量の二百石長吏の存在が想定されていなかった。しかし右に述べたように、少なくとも察挙によつて最初の淘汰を免れなければ将来の昇進を望めないとすれば、察挙制度が整備されてくる武帝期以後においては、察挙によらなければ高級官僚への道がかなり狭められたといえる。そうすると文献に見える例の多くは高級官僚へ昇進した者の場合であるから、そこから見る限りは当然、紙屋氏のような結論になるものと考えられる。すなわち、大庭脩氏が指摘したように、漢代官吏(官僚と属吏)の多くは平凡な人材で察挙にあずかることなく一生を終えたのであり、一部の者が察挙によつて長吏に就任し、さらに高級官僚へと昇進してい

ったと考えられるのである⁽⁵³⁾。まさに三・四号木牘には、文献という限られた事例を取り上げる世界とは別次元の、当時の一般的な事象が現われているのである。このように考えると、尹湾漢墓簡牘の出土によって、わずかに百数十名ではあるが、大庭氏が「官歴はもとより、名を求むることすら永久に不可能⁽⁵⁴⁾」と表現したような平凡な官僚の姿が追究できるようになった意義は、大変大きいといわざるを得ないであろう。

おわりに

以上によつて、これまでの拙稿で十分に述べられなかった三・四号木牘に見える長吏任用についての分析はほぼ終えた。ただ、これまで論じ残していた点が広範囲に及ぶため、本稿の分析はかなり雑駁なものにならざるを得なかった。また結論は、その分析の性格故に、ほぼ西川 A・B 論文で指摘した内容と同一である。そこでここでは、三・四号木牘の史料としての限界という点から若干分析して、筆者の今後の展望を示しておこう。

三・四号木牘はこれまでの分析で行ったように、前職から長吏への異動過程は判明する。しかしそこには前職と現職としか記されず、前職に就任する以前の地位や、現職から次にどのような官職へと異動するのかといった情報はわからない。確かにそこに見えるさまざまな立場からの異動の実態から、本稿でも若干指摘したように長吏を中心としての異動傾向がある程度パターン化して推測できるが、そこから官僚や属吏の異動のパターンをすべて考えることはできない。特に長吏から次にいかなる官職へ異動していくのかは、長吏間の異動以外はまったくわからない。従つて、官僚からの異動組と属吏出身組とで長吏就任後の異動においてどのような違いがあるのかは、推測はできても実証することができない。ここに、三・四号木牘の情報の限界があることは間違いない。

また三・四号木牘は、東海郡所属の県の全長吏について情報が記されるという点で重要であるが、その記録は一郡に限られること、そしてそれが作成された成帝期のある一時点の記録でしかないということには、注意しなければ

ばならないだろう。例えば以前に指摘したように、確かに三・四号木牘に見える長吏の出身郡県に偏りが見られる⁽⁵⁵⁾。しかしそれは偶然に左右される可能性が強い。しかもそれが一郡に限られた一時的な記録であれば、李解氏氏のように長吏の出身郡県と就任官職の官秩との相関関係を見出すこと(五六頁)はほとんど不可能であるし、また陳勇氏のように、そこに汝南・潁川の両郡出身者が多いことから、これを後の「汝潁固より奇士多し」(『三国志』卷一四郭嘉伝)という諺との関連で理解しようとする(七八頁)のも難しいのではないだろうか⁽⁵⁷⁾。三・四号木牘から読み取れる長吏の出身郡県の傾向は、結局は東海郡近辺の郡国に集中することであり、それは嚴耕望氏や浜口重国氏の指摘⁽⁵⁸⁾を補強する以上のものではない。この傾向だけなら、他の郡国にもある程度普遍化して考えることができるだろう。

ところで長吏任用における本籍地回避制との関連でいえば、廖伯源氏も指摘するように(二一〇～二二頁)、一例ではあるが東海郡出身者がいる。それは、承県出身で承郷侯行人から新陽侯家丞に異動した匡己(31)である。ところが李解氏(五六頁)・陳勇(七六頁)・劉軍(五一頁)の各氏は、何故かこの事実を無視して、一人も東海郡出身者はいないとする。もつとも李解氏氏は「承」を姓と考えて「承匡己」という人物と考えているようである(五四頁)からよいとしても、他の二氏はこれをどのように理解するのかまったく不明である。西川A・B論文でも若干の限定を付けたように、そもそも侯家丞や塩鉄官の長・丞は、三・四号木牘に見える他の長吏と同様の地方官とみなすには問題がある。そうすると、これらの例を本籍地回避制との関連で考える必要もないと考えられるのである⁽⁵⁹⁾。先行研究は、この点が曖昧なまま『報告書』の「長吏名籍」という仮称に引きずられているのではなからうか。

以上のように三・四号木牘をはじめとする尹湾漢墓簡牘は、前漢後半期の東海郡にのみ適用できる事象と、ある程度普遍化できる事象とを見分けて分析しなければならないだろう。また本稿で考察したような地方行政という国政の一部分から、漢代の国政全般をどこまで見通すことができるかも考えなければならないだろう。特に察舉制度

研究では、ここに見える内容を直ちに応用できないと考える。例えば察挙科目の中でも廉が目立つのは、西川B論文で述べたように、それが主に長吏を任用する察挙科目であり、長吏に関する記録である三・四号木牘には当然その例が多くなると考えられるのである。そうすると、察挙制度全体における廉の持つ意味は、もう少し低いものと考えなければならぬ。

また三・四号木牘に見える察挙の例は少なく、これまでも分析でもかなりの推測で論じた点が少なくない。しかしこの数的な問題で、ここに見える察挙の事象を国政全般に及ぼせないというのではない。そもそも察挙制度は、国政の中枢を担う人材の拔擢の制度と考えることができる。このように考えれば国政の運営は実質的に、察挙によつて拔擢された少数のエリートによつて担われたと考えるのが妥当なのではなからうか。その中に、たとえば功次によつて昇進してきたものが存在したとしても、国政の中枢では彼らはむしろ少数派であつた。すなわち、武帝期以降の国家の意志決定の中心は、察挙によつて昇進した人材によつて担われたと考えられるのである。これを三・四号木牘に見える事象との関連でいえば、大多数の功次によつて長吏に昇進した属吏は国政の中枢にかかわることではなく、少数の察挙によつて三百石ないし六百石の長吏に異動した者のみが、国政の中枢にかかわる可能性があつたといえよう。

以上によれば、少なくとも前漢武帝期以降の国家の問題については、察挙制度研究を無視しては十分な研究を行えないと考える。国家という総体と、地方行政という部分とでは、問題とする次元を異にして考えなければならぬのではないだろうか。その意味でいえば、三・四号木牘に見える情報は、長吏任用における察挙制度の位置付けという点では有効かもしれないが、察挙制度研究全般には不十分だといわざるを得ない。もともと、国家の問題を武帝期よりも以前にまで遡らせて考える場合、基本的に察挙制度が未整備だったため、そこではあらゆる官吏の異動は、ほとんどすべてが功次によつて行われたと考えられる。このように察挙制度によつて拔擢された人材が存在

しない時期と、察舉制度が整備されてからの時期とで、国政の運営にどのような違いがあるのか、また国家の在り方にどのような違いが見られるのか。筆者の今後の視点は、このような方向にも向けられていくことになるう。

注

(1) 『中国出土資料研究』四、二〇〇〇年三月。

(2) 『古代文化』掲載予定。この拙稿は本来、本稿よりも前に出す予定であったが、掲載誌の関係で本稿よりも遅れることになった。

(3) 本稿で主に参照する三・四号木牘に関する先行研究は、廖伯源『簡牘与制度——尹湾漢墓簡牘官文書考証』(文津出版社、一九九八年八月)。

劉軍『尹湾木牘長吏除遷考——漢簡人事研究之二』

『出土文獻研究』四、中華書局、一九九八年一月)、李解民『《東海郡下轄長吏名籍》研究』(連雲港博物館・中国文物研究所編『尹湾漢墓簡牘綜論』所収、科学出版社、一九九九年二月)。

陳勇『尹湾漢墓簡牘与西漢地方官吏任遷』(同右『尹湾漢墓簡牘綜論』所収)

の四研究である。以下でこれらの研究を参照する場合、該当頁数のみを示すことにする。

(4) 本稿でいう長吏とはこれまでの拙稿と同様、『漢書』卷一九百官公卿表に記される県クラス(県・侯国・邑)の長官(令・長・相)と次官(丞・尉)に、三・四号木牘に見える侯家丞と塩官・鉄官の長・丞を加えたものを指すこ

とにする。また長吏を含む中央任命の官秩比二百石以上の官を官僚とし、各官府任命の吏(比二百石以上の場合もあるが、基本的には百石以下)を属吏とすることも、これまでの拙稿と同様である。

(5) 連雲港市博物館・東海縣博物館・中国社会科学院簡帛研究中心・中国文物研究所編、中華書局、一九九七年九月。

(6) 拙稿『尹湾漢墓簡牘三・四号木牘について——その復元を中心として——』(『鷹陵史学』二四、一九九八年九月、六九〜七五頁参照)。

(7) 以下、功次に関する基本的な点については、大庭脩『漢代における功次による昇進』(同『秦漢法制史の研究』所収、創文社、一九八二年。一九五三年初出)を参照。

(8) なお「積功」の場合、『報告書』釈文では「以積功」となっていて、その後に功次関係の異動理由に付く「遷」字がないが、写真を見ると「功」字の後が削れており、本来「遷」字があったと考えられる。

(9) 比二百石以上の官僚の官秩は一〇以上に細かく分類されるが、西川B論文で指摘したように、異動に際してはそれらを一つずつ上位の官秩に昇進していくのではなく、

いくつかの官秩が集まって官秩の層をなし、その層を一層ずつ昇進したと考えられる。いま比二百石と千石までの官秩の間で、その層を想定すると次のようになる。ちなみにこの表は、八百石と五百石の官秩が省かれた成帝の陽朔二年（前一二）以降の状況を表したものである。

附表 官秩の層

| |
|------|
| 千石 |
| 比千石 |
| 六百石 |
| 比六百石 |
| 四百石 |
| 比四百石 |
| 三百石 |
| 比三百石 |
| 二百石 |
| 比二百石 |

(10) 表一に掲げた者のうち侯僕・侯行人・侯門大夫の官秩については、紙屋正和「前漢列侯国の官制——尹湾漢墓簡牘を手がかりとして——」（『福岡大学人文論叢』三一四、二〇〇〇年三月）の指摘に従って百石と考える。

また西川B論文で述べたように、中央官府所属の属吏は、斗食以下の官秩でも功次による昇進機会があったと考えられる。以下、これら中央の斗食以下の属吏も含めて百石クラスの属吏ということにしたい。

(11) 7の左騎千人は、西川B論文で指摘したように、官秩が六百石なのか比六百石なのか判断に困るが、福井重雅氏の比六百石も六百石の官秩に含まれることがあるとする指摘（同『漢代官吏登用制度の研究』創文社、一九八八年、二九〇頁）に従って、ここでもこの官を六百石クラスとして考えておく。

なお陳勇「尹湾漢墓簡牘の幾つかの問題について」

漢代における長吏の任用・補論

（『東西学術研究所々報』（関西大学）六五、一九九七年九月）によると、「漁陽□□左騎千人」のうち不明の二字は、漁陽郡の都尉治でもある「要陽」の可能性があるという（二〇頁）。

(12) 前職が不明の者のうち68と71については、その一部が判読できる。まず68の「保宮」は、廖伯源氏も指摘するように『漢書』百官公卿表に見える「居室」が武帝の太初元年（前一二）に名称変更になった、少府所属の官府であろう（一六四頁）。ただしその具体的な官員構成はわからない。なお『報告書』の写真を見ると「北」字の後に文字が見えるが、写真が不鮮明で判読できない。

次に71の「五官」は、『漢書』百官公卿表などに見える五官中郎將の可能性があり、その属吏かとも思われるが、一方『続漢書』百官志などに見える郡府所属の五官掾の可能性もある。しかしいずれにしても写真で見える限り、「官」の後の文字は「中」や「掾」が入る可能性は少なそうである。

なお70は『報告書』釈文によると前職の記載がないが、写真で見ると不鮮明ながら、姓名と異動理由との間に前職の記載があるように見える。李解民氏は、この部分は『報告書』釈文の「失誤」であり、前職に関する三字分の文字を補うべきだとする（五〇頁）。そこで本稿でも李氏の指摘に従い、具体的には不明ながら三字分の前職であったと考える。

(13) 李解民氏は写真によって「文学卒史」の四字を補える

とするが、『報告書』掲載の写真では不明である。

- (14) 文学卒史の評価に関する基本的な方向性については、拙稿「尹湾漢墓簡牘の基礎的研究——三・四号木牘の作成時期を中心として——」（『文学部論集』（佛教大学）八三、一九九九年三月）で触れている。

- (15) 『漢書』地理志掲載の郡国には、もう一つ「淮陽」があるが、これは王国であって郡国名の後に「大守」と記すことはないと考えられる。

- (16) 『漢書』卷八八儒林伝に見える射策規定によると前漢末の平帝期でも、甲科（郎中）四〇人、乙科（太子舍人）二〇人、丙科（文学掌故）四〇人の合計百人であり、前漢時代には『漢儀』のような大量の射策合格者は出なかったと考えられる。この点については、拙稿「漢代博士弟子制度の展開」（『鷹陵史学』一七、一九九一年）を参照。

- (17) 如淳の引く『漢儀』は太子舍人の官秩を「比二百石」とするが、本文で引いたようにその他の史料では「比」字が付かないから、その官秩表記にも問題がある。

- (18) 李解民氏の研究を見ると、前職の官秩を強引に想定する傾向がある。例えば、本来官秩のない郷官たる孝者も斗食の官秩に相当するとして、長吏に任用される属吏は、斗食以上の官秩の者に限られたとする（七二―七三頁）。

しかし孝者＝斗食ということを示す史料はなく、またそれを想定できる論拠も欠いており、これは、斗食以上の者しか長吏への昇進の機会がなかった、とする前提のもとで考えだされた解釈としか考えられない。従って李氏

の研究は、示唆に富む箇所も多いが、前職の官秩の確定については全面的に支持することはできない。なお従来の察举制度研究では在野無官の者も察举の対象と考えられているが、李氏のような解釈をすると、従来の研究と根本的な齟齬を来すことになる。

- (19) 李解民氏は、『史記』卷一〇二張敖之伝の「以嘗為騎郎、事孝文帝、十歲不得調、無所知名」の例を引いて、一〇年が任期の一つの上限となっていたとする（六七頁）が、この張敖之伝の「十歲」が李氏がいうような意味を持っていたのか疑問が残る。そもそも張敖之の例は「騎郎」という郎官の例であり、これを三・四号木牘の軍吏と同一にみなせるかを検討しなければならないだろう。

- (20) 『統漢書』百官志一將軍条の本注に「比公者四、第一大將軍、次驃騎將軍、次車騎將軍、次衛將軍。又有前後左右將軍」とあり、またその注に引く蔡質『漢儀』に「漢興、置大將軍・驃騎、位次丞相、車騎・衛將軍・左右前後、皆金紫、位次上卿」とあるように、將軍は三公と並ぶ地位であったが、一方同じ將軍でもその中で若干の地位の上下もあつたようである。これを前提に表二の將軍史の官秩を考えると、『漢旧儀』には「丞相・太尉・大將軍史、秩四百石」とあつて、大將軍の史は丞相史と同様四百石であつたと考えられるが、その他の將軍史まで四百石と考える必要もなさそうである。そこでここでは、異動傾向からその官秩を二百石と考えた。

(21) 校尉にもさまざまなものがあるが、『統漢書』百官志によるとその官秩はいずれも比二千石である。そこで属吏構成も、いずれの校尉でも同様だとすれば、司隸校尉の属吏構成が参考になる。ただそれによっても校尉史の官秩はわからないが、陳勇氏が引く敦煌漢簡一三〇〇の

「制 曰可購校尉人錢五万校尉丞司馬千人候人三万校尉史司馬候丞人二万書佐令史人万」が(八四頁)、一つの手がかりとなりそうである。この内容も直ちに判断できない箇所もあるが、ここに見える「校尉史」が賜る購銭が、斗食や佐史の官秩と考えられる「書佐令史」よりも多く、これが地位の違いを表すとすれば、その官秩は百石以上となろう。

(22) 三・四号木牘の作成時期については、注(14)前掲拙稿を参照。

(23) 同右拙稿三・四頁参照。

(24) 本稿では、方正察挙が行われた時期を成帝期に限って考えたが、可能性は少ないものの元帝期や哀帝期の可能性もある。

ちなみに李解氏氏は、方正に察挙された「相守史」(95)および廉に察挙された「相書佐」(87・88)を丞相の属吏と考えるが(六一・六二頁)、これは廖伯源氏も指摘するように王国の属吏と考えられる(三〇頁)。それは、丞相の属吏であれば80・81のように、王国や侯国の相と区別するために「丞相」と明記されると考えられるからである。なお「相守史」の官秩は、仲山茂「漢代の掾

史」(『史林』八一・四、一九九八年)の指摘に従って、斗食と考える。

(25) 注(24)仲山前掲論文、九六頁参照。

ちなみに紙屋正和氏は注(10)前掲論文において、さらに『史記』卷一〇一袁盎伝や張家山漢簡『奏讞書』案例一五の記事から、王国や県にも従史が存在したことを指摘する(二四頁・四二頁)。なお尹湾漢墓簡牘の「元延二年日記」と題される竹簡にも、正月一六日(簡番号二六)の箇所「旦謁胃従史休宿家」なる記載がある。ここに見える「従史」がどの官府に所属したのかにわかに判断できないが、「宿家」とあり墓主の師饒は地元にしたことは間違いないと思われるから、東海郡の郡府か同郡内の県廷の所属の従史だと考えられる。

(26) 李解氏氏は、『報告書』釈文で「捕格」とされるもののうち卹は、木牘の実物や写真を見ると「捕斬」とするべきであるという(五〇頁)。

(27) なお「山陽亡徒」「山陽賊」と沛郡・南陽郡出身の属吏の関係については、注(14)前掲拙稿一二頁の注(11)を参照。

(28) 官僚からの推薦の形態としては、劉軍氏が引く『漢書』卷七一薛広徳伝の「蕭望之為御史大夫、除広徳為属数与論議器之、薦広徳経行宜充本朝、為博士論石渠」というものが考えられる(五一頁)。この例には皇帝のかかわりが見えないが、例えば『漢書』卷八一匡衡伝に「(大司馬車騎將軍史高)辟衡為議曹史、薦衡於上(11)元

帝)、上以為郎中」とあるように、官僚からの推薦をうけて皇帝がその人材を任用した。これらはいずれも属吏を推薦するものであるが、例えば『漢書』卷七十二王吉伝には、彼の子の王駿が郎官の時に「左曹陳咸薦駿賢父子明經行修宜顯以厲俗、光祿勳匡衡亦舉駿有專對材、遷諫大夫」とあるように、官僚も推薦の対象となることがあった。

ちなみに廖伯源氏は、請詔によつて異動した者は「遷除の条件が法令に符合しなかった」から官僚が推薦したという(三七頁)が、根拠がない。

(29) 劉・李両氏は『漢書』宣帝紀の「諸請詔省卒徒自給者皆止」を挙げるが、師古注によれば、これは「徒卒」を削減してその経費を浮かそうとするための「請詔」であつて、異動理由としての請詔の手続きを具体的に示すものではない。

(30) 「詔除」の例としては、『後漢書』紀四和帝紀に「永元元年(八九)春三月甲辰、初令郎官詔除者得占丞・尉、以比秩得為真」とあり、李賢注には「漢官儀曰、羽林郎出補三百石丞・尉、自占。丞・尉、小県三百石、其次四百石、比秩為真。皆所以優之」とある。これは意味の取りにくい点もあるが、恐らく郎官で「詔除」された者は、県の丞・尉に「自占」(自ら選ぶことか)して比三百石の官秩から三百石の官に異動できるようにしたのであろう。それではこの「詔除」とは何かというと、例えば『隸釈』卷七の「車騎將軍馮緄碑」に「弱冠詔除郎」という

のがあるが、これを『後漢書』伝二八の本伝で確認すると「会(馮)煥病死獄中。帝愍之、給煥・(姚)光錢十萬、以子為郎中」とあり、結局は任子を意味すると思われる。これでは、三・四号木牘の「請詔」とは直接関係しそうなない。また『漢書』卷八五谷永伝には「免不正之詔除」とあるが、この師古注は「除、謂除補為官者」と「除」の意味しか説明していない。結局「詔除」とは何を意味するのかわからないが、馮緄の例からすれば任子の可能性が高い。

ちなみに、劉軍氏は「請詔除」と「詔除」を別の異動理由と考え、「詔除」を皇帝が詔書によつて直接官僚を任命するものとする(五一頁)が、筆者は「詔除」を氏のように考えるとしても、その前提には官僚の推薦があつたと考えられるから、結局は「請詔除」と「詔除」は内容に違いがなく、本文でも触れたようにIIの「詔除」は「請」字が抜けているのだと考える。

(31) 表薦とは、福井重雅氏が「文字どおり上表して推薦することを意味するものであつたらしい」(注11)福井前掲書、二二三頁)と述べるように、ここで考える請詔と同様の内容だと考える。

(32) 標点本は「史」を「吏」とするが、両者は通用するから「史」でよいと考える。

(33) このように考えると、『漢官』の記事は廷史(廷尉史)に関するものではない可能性もある。また『漢官』(『漢官六種』所収)に記される中央官府所属の文学の定員を

見ると、大司農府で二〇名と廷尉府よりも多くなる以外は、太僕八人、大鴻臚六人、大行五人、衛尉三名、執金吾三人と比較的少ないから、廷尉府の「十六人」という数字は「廷史」と「文学」を足した合計といえるかもしれない。しかしいづれにしても、「十六人二百石廷史」のように官秩の表記の後に職名が来るのは、『漢官』の同様の記載から見て不自然である。

- (34) 廖伯源氏は『報告書』釈文のままにしているが、この官を「成帝修陵之土作官」(二三頁)としているから、李氏と同様に「復」字として考えているようである。

- (35) 『史記』文帝紀の集解には「如淳曰、主穿墳塋瘞事者」とあり、同じく索隱には「復、音伏。謂穿墳出土、下棺已而塋之、即以為墳、故云復土」とあるところから、復土とは陵墓への棺の埋葬を意味したと考えられる。このように解釈すると、復土関係の職は埋葬時に一時的に置かれた官であり、恒常的に置かれたとは考えられない。
- (36) 『史記』文帝紀に「発近県卒万六千人、発内史卒万五千人、臧郭穿復土属將軍(張武)」とある。
- (37) 注(28)に掲げた史料によっても、中央官府の官僚・属吏は、高級官僚からの推薦をうける機会が多かったことが推測できよう。

- (38) もっとも黄覇のように、太守のままで官秩を八百石に貶される場合もあった(『漢書』卷八九循吏伝の本伝)。

- (39) 注(11)福井前掲書、二九〇頁参照。
- (40) 二百石・比二百石の貶秩も考えられるが、それは貶秩

ではなく、文献にいう「免為庶人」のような措置がとられたのではなからうか。

- (41) 『漢書』百官公卿表下から彼に関する記事を抜き出すと、次のようになる。

永始三年(前一四)条―東平太傅彭宣為右扶風、一年遷。

同四年(前一三)条―右扶風彭宣為廷尉、三年以王國人

為太原太守。

綏和元年(前八)条―太原太守彭宣為大司農、一年遷。

同二年(前七)条―大司農彭宣為光祿勳、六月遷。

光祿勳彭宣為右將軍、二年遷。

建平元年(前二)条―右將軍彭宣為左將軍、一年、坐与淮

陽王婚免。

元寿元年(前一)条―八月辛卯、光祿大夫彭宣為御史大夫。

同二年(前)条―五月甲子、御史大夫宣為大司空、三

月病免。

ここで気付くのは、確かに廷尉の時の太守への転出理由は「王國人」であるが、左將軍の時には淮陽王との婚姻関係が問題にされており、王國人が問題にされていないことである。またその他の異動では、王國人たることがまったく問題になっていないようである。

- (42) 写真で見ると「大」の次の文字が若干残っているが、不鮮明でどのような文字かが判明しない。

- (43) 二百石属吏は公府および三輔の属吏に限られるから、前職が「大□□」と記されることからすると、属吏の場合で該当する官府としては大尉(太尉)とならう。

なお『漢旧儀』によれば、丞相府には三百石の官秩の少史が存在した。太尉府にも同一の少史が存在したとすれば、「功」による異動の場合でも属吏の可能性がある。ただ三・四号木牘の場合、功次による異動では官秩の高い属吏の異動例は見られず、また118の前職が积文のように不明部分が二字であれば「大尉少史」の可能性はなさそうである。

- (44) 廖伯源氏は、120の「□事□廉丘右尉」を「□事□」と「廉丘右尉」の二つの職名と見るが(二七五頁)、その積極的根拠に欠けるので、本稿では120は一職と考えておく。
- (45) 李解民氏は、このような可能性を示唆する(六九頁)。
- (46) あるいは前職の記載が木牘の下端近くまであるから、異動理由が記入できなかったのかもしれない。ただ尹湾二号木牘などでは記載が下端いっぱいまできているから、その可能性は小さいと考える。

- (47) 西川A論文では「□事□」のうち、三文字目の不明文字を「守」字の可能性があると考えたが、写真を見るとその可能性は少なそうである。そうすると「廉丘右尉」は本官だった可能性が高くなる。いずれにしても「□事□」は、写真で見ると不鮮明でどのような文字かはわからない。鮮明な写真の公表を願いたいものである。

- (48) このように考えると、十歳によつて異動した校尉史が問題となる。ただ本稿で述べたように、これが功次と同様の性格だとすれば、十歳を功次に含めてもよいと考えらる。

- (49) 孝者をはじめとする郷官に関する基本的な点については、鎌田重雄「郷官」(同『秦漢政治制度の研究』)所収、日本学術振興会、一九六二年)を参照。

- (50) この点については、拙稿「漢代における郡県構造について——尹湾漢墓簡牘を手がかりとして——」(『文学部論集』(佛教大学)八一、一九九七年三月)を参照。

- (51) 尹賞に関する記事を『漢書』巻九〇酷吏伝の本伝で見ると「以郡吏察廉為樓煩長」とあって、郡吏から廉に察せられて県長に昇進しているが、本文で引いた薛宣伝の記事によると「久郡用事吏、為樓煩長」とあり、察廉以前にかなり長期(久)の属吏経験があったようである。そうすると薛恭の「未嘗治民、職不辨」というのは、属吏の経験が尹賞ほどなく、孝者から察舉などによつて官僚に昇進し、その後功次などによつて県令に昇進したことをいうのではないかと考えられる。あるいは三・四号木牘の二例の孝者の如き昇進過程を経たのかもしれない。

- (52) 紙屋正和「前漢時代における県の長吏の任用形態の変遷について」(『福岡大学人文論叢』一八一、一九八六年)。

- (53) 注(7)大庭前掲論文参照。

- (54) 同右、五六四頁。

- (55) 注(14)前掲拙稿参照。

- (56) 李解民氏は、出身郡県によつて就任する官秩にも違いが見られるとして「臨淮郡・丹陽郡出身の長吏の官秩は

一般的に高く、潁川郡出身者の官秩は一般的に低い」とする(五六頁)が、三・四号木牘がある一時点の記録だということをも前提とすれば、これを普遍化して考えることはできない。

(57) 陳勇氏が紹介する諺は、後漢時代の全国的傾向から見ても、汝南郡・潁川郡出身者に「奇士」が多いことをいうのであって、東海郡という一郡の長吏に両郡出身者が多いことをもつて、それを後世の傾向と同一視するのは問題がある。また氏はこのことを補強するために、京兆尹および汝南・潁川両郡は東海郡から距離的に隔たっており、これらの出身者は長吏任用で優遇されたという(七八頁)が、氏が東海郡に隣接しているとする沛・陳留両郡などと郡界を接する汝南・潁川両郡が、それほど東海郡と離れているのだろうか。

(58) 嚴耕望『秦漢地方行政制度』(『中国地方行政制度史』上篇、中央研究院歷史語言研究所、一九六一年)第一章、および浜口重国『漢代に於ける地方官の任用と本籍地の関係』(同『秦漢隋唐史の研究』下巻所収、東京大学出版会、一九六六年。一九四二年初出)参照。

(59) 廖伯源氏は、侯家丞は列侯の「家臣」であり県の行政に関与しないから本籍地回避制の制限を受けなかったと

する(二一〇～二二一頁)。しかしそれだけならば、他にも東海郡出身の侯家丞が存在してもよいはずで、やはり再考の余地がある。

ちなみに紙屋氏は、侯家丞以下の侯家臣が大鴻臚に所属したと推測する(注10)紙屋前掲論文、三二頁参照)。氏の推測が正しいとすれば、侯家丞は、その任用においても一般の長吏とまったく性格を異にすることになる。(補注) 本稿校正段階で、注(3)に掲げた研究以外で本稿にかかわる研究として于琨奇「尹湾漢墓簡牘与西漢官制探析」(『中国史研究』二〇〇〇—二)が出たが、三・四号木牘についての分析は、注(3)前掲の諸研究と大差はない。

〔付記〕 本稿は、西川A・B論文とともに、佛敎大学より認められた一年間の研修(一般)の期間中に得られた成果の一部である。厳しい教員構成にもかかわらず研修を認めていただいた史学科の先生方に特に感謝するとともに、本学関係各位に感謝の気持ちを込めて、ここに本稿が研修成果の一部であることを特記したい。なお研究条件が一層厳しくなる中、今後とも本学の研修制度が堅持されることを願いたいものである。

